

# 人生の転機になるような出会いを



学長  
すみだ くにしげ  
**角田 邦重**

新入生の皆さん、入学おめでとう!!

もちろん皆さんは、それぞれの想いを胸に中央大学に入学されたことでしょう。いずれにせよ、人生の最も多感な時期を、中央大学で過ごすことになるのです。そして、学びと、友人を始めとする人との交流の両面にわたってさまざまな出会いがあり、成長の過程では悩みも挫折も経験することでしょう。深い悩みを経験した者がもつとも良く成長するものだと言うべきなのでしょうから。そう考えるだけに、私は、皆さんに、人生の転機になるような学生生活を

送ってもらいたいと思うのです。そんな想いで自分の学生時代を振り返ってみる気持ちになるのも、恐らく、私がそれなりに歳を重ねたせいかもしれません。

今は法律学（労働法）を専門にしていますが、九州で過ごした高校生のころはどちらかと言えば文学青年で、大学に行くなら文学部だと決めていたものです。しかし東京に出たという切実な思いは、事務所を手伝いながら大学に通う者を探していた郷土出身の弁護士と出会って実現することになり、中央大学の法学部が良いのではということになりました。

た。今から考えると、文学青年から法律家志望への転身という人生最初の転機です。もつと直接的な転機は、漠然と卒業後の進路を考えるようになった大学二年生の秋に、司法試験の受験を目指す受験団体の一つに入会したことです。入会してまもなく、それまでの情性でサルトルの小説か哲学書を読んでいた私の肩を叩いて外に連れ出したのは、その年の司法試験に合格したばかりの先輩で、その日から、受験団体特有の手弁当による指導を受けるようになりました。朝九時には机の前に座り、原則として夜一〇時までは大学に残る、日曜日は答案を書き、終わったら仲間でもう一度点検し合うといった判で押したような受験生活でした。人生二度目の転機は、この出会いにあったと思っています。

「波が運んできた。それが人生だ」とはフランスの実存哲学者サルトルの言葉ですが、人生は決められたレールの上を走って行くのではなく、

与えられた環境の中で一瞬ごとに将来を選び取る行動の連続（「投企」と訳されています）なのだという位の意味だと思えます。何か行動を起こしたわけでもなく、判で押したように退屈きわまりないように見える毎日でしたが、精神的には緊張の連続で、それなりのドラマでもありました。今になって振り返ると、むしろ息をひそめるように一つのこと集中する時期をもったことが転機をつくり、また仲間がいてこそ出来たのだと思っています。

中央大学は全国から三万人の学生が集い、文・理にまたがる学部、大学院をもった総合大学として、学ぶ環境も、人との出会いも、十分に用意しています。人生の転機になるような出会いを経験してもらいたいです。皆さんの健闘を期待しています。